

専門基礎科目「社会保障制度の実際」における フィールドワークを主体とした教育の取り組み

The Approach of Fieldwork-Based Education in Practice of Social Security System

棚橋 泰之 久保木由美

Yasuyuki TANAHASHI, Yumi KUBOKI
(神奈川歯科大学短期大学部看護学科)

キーワード：フィールドワーク アクティブラーニング 社会保障制度 看護短期大学

I. はじめに

2025年に第一次ベビーブーム世代が後期高齢者となることから介護需要の増加が見込まれ、住み慣れた地域で尊厳ある生活が継続できるように地域包括ケアシステムの構築が推進されている¹⁾。

他方、現代社会においては、少子高齢化や労働人口の減少、正規雇用者の失業リスク、ニート、長時間労働、世帯人数の減少、単身世帯の増加、老々介護、虐待、ゴミ屋敷問題などの生活基盤の脆弱化が指摘されている²⁾。このわが国の人口構造、労働環境、家族構造、地域社会の変化といった社会の変動は、人々の生活に様々な影響を与え生活を脅かしている。

このような生活問題に対して、社会福祉の実践は、人々の抱える生活問題に対して安定した生活に向けた支援を行っていく活動であるが、支援を展開するにあたっては、個々の問題状況と背景にある制度上・社会関係上の問題を視野におくことが重要とされる。この社会福祉の支援の志向性は、対象を全人的に把握し個別の健康問題を追及していく看護の志向性とも共通点があり、背景にある制度等を把握することは看護の幅が拡充されるものと考えられる。

また、厚生労働省の看護基礎教育検討会においては人々の療養の場が多様化し地域包括ケアが推進されるなかで、病院以外のさまざまな場面で看護ニーズが拡大する状況における看護を養成時から理解する必要性が指摘されている³⁾。今後は、保健、医療、福祉サービス等の専門職と連携することを視野に入れながら、看護師としてケアを提供するうえでの社会保障や社会福祉の制度の理解が不可欠である。

一方で、昨今の基礎看護教育における教育方法については、学生の能動的な学習を促進するアクティブラーニングが進められている。アクティブラーニング型授業には、4タイプがあるとされ、学習の形態、主導形態、技法・戦略もさまざまである⁴⁾。今回、看護短期大学2年前期に開講している専門基礎科目「社会保障制度の実際」の授業を新たに構築した。当該科目の学修目的である「生活の安全と安定を保障する基本的な制度について看護学生として最低身につけるべき社会保障とその実践例を理解すること」の方略として、フィールドワークというアクティブラーニング型授業を取り入れた。その導入の経緯、フィールドワークの概要、今後の課題について報告する。

II. 社会保障制度の実際の授業概要

専門基礎分野「社会保障制度の実際」は、生活の安全と安定を保障する基本的な制度について看護学生として最低身につけるべき社会保障とその実践例を理解することを学修目的とし、2年次前期の必修科目30時間1単位として開講している。1年次に開講されている社会福祉概論、保健医療福祉概論の知識を前提とし、より現実的に実践されている内容の理解から看護師の立場からのケアを考える素地をつくることをねらいとした科目である。

従来の授業では、講義を主体とした授業展開とし社会保障制度の4つの柱「社会保険」、「社会福祉」、「公的扶助」、「保健医療・公衆衛生」の具体的な理解を目指した内容であった。

しかし、実践例の理解を促進するには、その場に身を置き学習者自身が実際に課題対象となっているものを体験することが最も効果的であると担当者で協議した。そ

ここで、フィールドワークという手法を取り入れた授業設計に取り組んだ。

Ⅲ. 授業設計の取り組み

1. フィールドワーク施設の選定について

ある一定の期間に実施される看護学の臨地実習とは異なり、授業時間90分～180分という時間制限の中でのフィールドワークを設定しなければならない点が難題となった。社会福祉施設には大別して老人福祉施設、障害者支援施設、保護施設、婦人保護施設、児童福祉施設、その他の施設がある。大学近隣にも数十、A市だけでも数百ヵ所にも及ぶ社会福祉施設が存在し、また、授業時間内という制限の中で受入れ可能な施設をどのようにサンプリングしたら良いのか悩み、A市福祉部高齢福祉課並びにA市福祉部介護保険課に相談した。

結果、本授業の意義を理解していただくことができ、学生の受け入れが可能と思われる施設数か所ならびにA市で運営しているA市点字図書館でのフィールドワークをご提案いただくことができた。その後は、授業の趣旨を説明しフィールドワーク受入れの可否を施設に出向き個別に承諾を得た。

最終的に社会福祉施設（以下、施設）9か所並びにA市点字図書館でのフィールドワークが可能となった。9か所の施設の内訳は、就労継続支援B型4施設、知的障

害者地域作業所1施設、指定障害者支援施設1施設、生活介護自立訓練施設1施設、介護予防運動施設1施設、有料老人ホーム1施設であった。学生の受け入れは時間・人数とも施設によって異なり、時間は1回につき1時間から3時間程度、人数については2～5名であった。9施設の確保によって当該科目履修者82名分がA市点字図書館といずれかの施設1箇所でのフィールドワークが可能となった。施設の開拓のためにA市福祉部への相談を手掛かりに各施設への説明、承諾に至るまで、2019年1月初旬から4月初旬の期間を要した。

2. 授業構成とスケジュールについて

フィールドワークを行う際には、事前に基礎的な学習をした上で課題を与え、ある程度の知識を持ったうえで、「知識を活用する」という目的で行われることが多い方法である。そして、フィールドワークの後には、調査結果のプレゼンテーションが効果的であると言われていた。そのため、本授業においても15回分の内容を構築する際に課題とフィールドワークを二つの柱とし、フィールドワーク後に施設毎のプレゼンテーションを設定した。

表1に15回の講義スケジュールを示した。15回分をガイダンス1コマ、課題6コマ、フィールドワーク6コマ、報告会（プレゼンテーション・まとめ）2コマとして割

表1 講義スケジュールと目標

実施回	内容	目標
1	ガイダンス ・シラバスの内容の確認 ・課題に関する説明 ・フィールドワークに関する説明 ・成果物に関する説明 成果物: 自分の実施計画	①授業概要、目標、方法が理解できる。 ②課題、フィールドワークを実施するうえでの配慮すべきこと、注意すべきことが説明できる。
2,3,4	課題1 ライフステージと社会保障制度 成果物: ライフステージ毎の社会保障制度一覧表	①ライフステージで遭遇する様々な困難を調べられる。 ②利用できる社会保障制度と給付制度の概要を説明できる。 ③ライフステージ毎の社会保障制度を一覧表に表現できる。
5,6,7	課題2 地区踏査 成果物: ①福祉サービス施設マップ ②地区独自のサービス(マップ内に記載)	①自分が生活する地区の福祉サービス施設を調べられる。 ②自分が生活する地区の独自のサービスを調べられる。 ③福祉サービス施設をマップとすることができる。 ④地区独自のサービスを説明できる。
8,9,10	フィールドワーク1 点字図書館 成果物: ①レポート(目的、実施日、実施内容、評価、感じ・考えたこと、看護への活用など) ②イメージマップ(前・後)	①視覚障害者に対する自己のイメージを話し合い、イメージマップを作成できる。 ②フィールドワークの体験をレポートにまとめることができる。
11,12,13	フィールドワーク2 社会福祉施設 成果物: ①レポート(目的、実施日、実施内容、評価、感じ・考えたこと、看護への活用など) ②プレゼンテーション資料(グループで作成)	①社会福祉施設の概要が説明できる。 ②フィールドワークの体験をレポートにまとめることができる。 ③フィールドワークの学びをグループで共有できる。
14,15	報告会 施設での学びをグループ毎にプレゼンテーション	①フィールドワークでの学びを共有できる。

り当てた。

初回の講義は、教室で全員にガイダンスを実施した。学修目的、評価方法、個別の実施計画、個人ワークの際の使用場所、出欠の方法、フィールドワーク中の服装・態度、成果物の書き方と取り扱い、個人情報保護等について説明した。また、フィールドワークの日程と施設は、学生の最寄り駅を考慮し教員が決定した。

課題については、知識を持たせることが主眼であり個人ワークとして2点提示した。1つ目の課題は、1年次に学修した社会福祉概論、保健医療福祉概論の知識を基盤として「ライフステージ毎の社会保障制度一覧表」の作成とした。ライフステージ毎の困難状況が確認でき、各期における社会保障制度の大枠を自分が理解できる一覧表を作成するように説明した。2つ目の課題は、自分が生活している地区にある「福祉サービス施設マップ」の作成と「地区独自のサービスの把握」とした。フィールドワークの前提知識の獲得と様々なタイプの施設があることへの理解について、自分が居住する地区について踏査することによって、前向きに学習することが可能となるものと考えた。そして、より社会福祉に対する興味関心がもてるようになることを意図した課題とした。

次にA市点字図書館におけるフィールドワークであるが、「視覚障害者のことを正しく理解し、看護としてどのように関わることが必要なのか」を考える機会としたという思いを伝え、具体的な体験内容については先方に一任した。3時間のフィールドワークの中で、点字図書館の概要説明、施設見学、支援ポイントのDVD聴取、視覚障害者の方とのコミュニケーション、言語のみでものを伝えるワークなどの体験が設定された。

また、フィールドワークの前後で、視覚障害者に対する自己のイメージが実際の体験を通して、対象の理解が促進しイメージに広がりを持つことを確認するため、視覚障害者に対するイメージマップを描くこととした。

社会福祉施設9か所でのフィールドワークは、就労継続支援B型施設、知的障害者地域作業所、指定障害者支援施設、生活介護自立訓練施設、介護予防運動施設、有料老人ホームである。設置主体や規模、利用者も各施設まちまちであるため、目標を「施設概要を把握すること」と「利用者と交流すること」とし、可能な範囲で体験内容に加えていただくよう依頼した。施設の概要説明、施設見学、生産活動支援の見学、利用者との対話、活動への参加、トレーニング体験等、施設毎に様々な内容が設定された。

最後に報告会（プレゼンテーション・まとめ）であるが、自分が体験できなかった施設での学びを共有する目的で、施設毎のプレゼンテーションを各10分質疑5分とし、学生主体の運営として設定した。学びの共有が目的であるため具体的にどのような学びが得られたのかを、

実施内容と共に報告するように指導した。

IV. 学生の学びの概要

15回の講義後に、学生から提出された成果物から学びの概要について述べる。

課題1のライフステージ毎の社会保障制度一覧表については、保健・医療、社会福祉、所得保障、労災・雇用、公衆衛生の5つの視点から社会保障制度の概要が把握できていた。課題2の福祉サービスマップでは、最寄り駅を中心にバス停、保育園、学校、公園、スーパーなどの生活環境とともに介護施設、訪問看護ステーション、コミュニティセンターなど様々な福祉サービス施設が描写されていた。また、地区独自のサービスとして超高齢化社会により活発化している行政のエンディングサポート事業にも着目していた。

次に、点字図書館のフィールドワークにおいては、視覚障害者の生の声を聴くことから多くの事を知り、視覚障害者について考える機会となっていた。多くの学びと視覚障害者を捉える視野が広がり、事前に感じていた負のイメージは払拭されていた。

社会福祉施設のフィールドワークでは、施設の役割や機能と施設の存在意義について学んでいた。また、スタッフの姿勢からクライアントを中心としたソーシャルワーカーの実践活動を知り大きな学びとなっていた。多くの学生は知的障害者や精神障害者と接することが初めてであり戸惑いを感じながらも、利用者と対話することで、障害の程度や症状、コミュニケーション方法など個人差があることに気づくことができていた。一人ひとりにあった接し方をすることで心を開いてもらえることや関わってみることで偏見が少なくなることも体験から学んでいた。

V. まとめ

社会保障制度の実際でフィールドワークを導入した授業の概要について報告した。今回は2つの課題にそった基礎的な学習をした上で、施設のスタッフや利用者との関係性の中で学習を進める意識を高くもち主体的にフィールドワークに臨めることができた。そして、短時間であるがその場に身を置くことでしか、体験できない多くのことを感じ、考えることができていた。また、体験を通して看護師を目指して学ぶ姿勢、人と関わる態度を学ぶ機会となった。

しかしながら、授業の取り組み方には個人差があり、グループワークへの参加姿勢にも差がみられ、この点について工夫が必要である。また、フィールドワークはラーニングピラミッドにおいて学習定着率が高い手法とされているが、どの程度の定着があるのかの検証も今後の課題とする。最後に、フィールドワークにあたってはA市

福祉部各課の方々の助言と支援を賜り、また各福祉施設には快く受け入れていただき実現に至ることができた。これらのつながりを保ちながら授業内容を改善し次年度に続けていきたい。

引用文献

- 1) 厚生労働省：地域包括ケアシステム (https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/)。)
- 2) 横山登志子：社会福祉実践の理論と実際、放送大学教育振興会、2018。
- 3) 厚生労働省 第10回看護基礎教育検討会：看護基礎教育検討会報告書、2019。
- 4) 阿部幸恵監修：看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入、2018。